

## 喜びと楽しさが大きくふくらむ保育

「失敗をさせて気づかせたい」と思うとき、おとなの気持ちの中にはイライラが少しは混ざり込んでいると私は思います。その子を大切にしたい気持ちが基盤にあるとしても「この子はどうしてこうなのか」と、否定する気持ちが混ざり込んでいます。そんなときには、その子の苦しさや心のふるえに目が向きにくくなってしまいます。

子どもたちの喜びをわがことのように喜ぶ保育者集団の基本姿勢は、保育者の意識がいつも子どもの気持ちに向けられていることを意味しますし、それは子どもを尊重していることにほかなりません。だからこそ、子どもたちは自由に思いをめぐらせ、保育者の予想をこえた成長をしてくれるのではないのでしょうか。そして、このような保育者集団に、親も心から安心と信頼を寄せることができるのではないのでしょうか。

楽しいことがあると心が安定するということは、私たち自身の経験に照らし合わせても納得できることです。仕事がいっぱいたまってイライラしているときや嫌なことがあったとき、私たちは怒りっぽくなります。楽しい旅行や楽しいイベントが待っているときや、友だちと楽しい時間を過ごしたあとでは、ささいなことには寛容になれる。楽しみがあるかないか、苦しいことがあるかないかによって、私たちの心の状態は怒りっぽくなるのか穏やかにいられるのか、大きく左右されます。

子どもがかみつきや乱暴などの否定的な行動をとったとき、私たちは「いいことはいい、悪いことは悪い」ときちんと伝えることが必要だと考えて、きつく叱ってなおそうとしがちです。しかし、ちょっと待って。その子に楽しいことがあったらどうか、楽しくない生活を強いられていたことはないだろうか、思い直してみることも必要ではないのでしょうか。

叱るということは、嫌な気持ちを体験させることです。乱暴なことをしてしまったときには叱らなければなりません。叱ることによってのみ行動を改善しようとする、その場では反省したように見えても、次の場面ではまた乱暴が出やすい精神状態に子どもを追いやっているかもしれません。毎日の生活を楽しくして、乱暴な行動が出にくくなるように導くことが、基本的な対応として行われていなければならないといえるでしょう。

子どもの喜ぶ顔が見たい、子どもを楽しくさせたいという気持ちは、子どもを育てるおとなに本来備わっている自然な感情なのだろうと思います。だからこそ、子育てをふり返って、子どもに楽しい生活を保障できなかつたり、苦しい思いをさせてしまったと感じたとき、親は強い後悔を感じるのでしょうか。今日の競争社会なおなかでは、親自身も生きにくく、希望を持ちにくくなっています。子どもの将来への不安もわいてきます。親のあせりが、子どもの喜びや楽しさに心をとめるゆとりを奪ってはいませんか。

保育も同じです。仕事が増えて保育者自身が極めて忙しくなっていますし、保育が評価されることによって、何らかの目に見える成果が求められているような気持ちにさせられてしまいます。そんなとき、子どもを楽しませたいという、保育者のもっとも基本的な素直な気

持ちが壊されてしまっていないでしょうか。

喜びや楽しさは、子どもの心を動かす経験です。心が動いたとき、子どもは自らを成長させていきます。また、喜びや楽しさは子どもの気持ちを安定させることによって、自己をコントロールする力の土壌となります。保育や子育てにおいて、子どもが喜んだり楽しんだりしていること自体に価値がある、と考えるべきだと思います。子どもの喜びや楽しさを大切にできるゆとりを、育てるおとなの心の中にしっかり位置づけたいものだと思います。

4歳児のAちゃんは保育者にも心を許さず、自分のミスがあってもなかなか認められず、その結果、友だち関係をつくるのがむずかしい子どもでした。Bくんが許してくれず困り果てたAちゃんは、はじめて涙目で保育者に救いを求めます。保育者は「悲しいよね」という言葉でAちゃんの気持ちをくんでいっしょに謝りに行ってくれました。この時、Aちゃんは「困ったときには保育者に頼っていい」「保育者の前で泣いてもいい」という甘える経験ができたのです。甘えることができたとき、つっぱっている必要がなくなるので友だちにもやさしくなれて、困っているCちゃんたちに気づくことができるようになりました。

自立とはおとなに頼らなくなっていくこと。だけど、そのためにはおとなに頼る経験が必要ではないでしょうか。甘えることと、友だちの中に入っておとなから自立していくこと。一見背反するように見える二つのことが、相互に結びついています。甘えを卒業するから自立できるのではなくて、甘えることができるから自立することができる。それが「甘えつつ自立する」ということなのだと思います。

おとなが忙しくなって子どもと十分かわる時間がとれず、その結果、子どもの自立を急がせたくなくなってしまいう現代だからこそ、甘えと自立のつながりを再確認して考える必要があるのではないのでしょうか。

小さな人に対して、私たち大人は圧倒的に強い立場に立つ人です。瞬時の価値判断で子育てや保育を重ねていく時、圧倒的に強い立場でまちがった判断をしてしまうことがあります。私にも思い当たることは山のようにあります。私は厳罰主義のしつけや保育は慎重に考えるべきだと思います。

そして、規範意識の一つの到着点は、自分が価値ある人間になっていくことを喜んでくれる人がいっぱいいると信じられたとき、子どもたちは前向きに自分を見つめ直していけるようになっていくということであり、保育園生活の6年間は、6年だけでは終わらない影響力をもっています。